



生かされる命を見つめて 変わる、変わらん、 変わらん、変わる。

今年も「報恩講」をお迎えいたします。何事を置いても勤めさせていだけてきた「報恩講」、その一つ一つを思い返すと色々なことが蘇ります。

ご門徒の人たちでお寺が賑わって嬉しかった幼い頃の報恩講、ご本山奉職時代の盛大な報恩講、カナダで、日本では失われてしまった家庭の報恩講や地域の報恩講などの伝統が、言葉も違う国にきちんと受け継がれているのに接した感動、父が亡くなり葬儀と併せて勤めた報恩講もあり、この奏庵も報恩講から始まりました。

そして今年には自らが命に直面する病を得て迎える報恩講です。思い出深い報恩講の一つになることと思いますが、先立っては北海道の自坊の報恩講を勤めてまいりました。お参りのご門徒は髪の毛の無くなった私に涙しながらも、今確かにお互い命あって集えることを喜び合い、例年の通り粛々と勤めさせていただくことができました。毎年勤め終える度に「ありがたく」思う報恩講ですが、今年の報恩講にはまた違った「ありがたさ」と「気づき」を味あわせていただきました。

* * *

ハワイの開教総長も勤められた

故大原性実師の次のような法話を思い出します。

…「ご信心をいただいたら、どのようになるのでしょうか。前と変わった人間になるのでしょうか」と質問をいただくことが良くあります。私は決まったように「それは、変わる、変わらん、変わらん、変わる、ということになります」と答えます。それは本来、凡夫の機相は性得の機といい、生まれ落ちたときから最期まで変わらない。欲しい、惜しい、憎い、可愛いなどという、三毒五欲の本能の支配を受けているのが人間の姿であり、これは「変わらない」という一面です。それでは「変わる」ところはどこかかというと、今まで、両舌、悪口、妄語、綺語、を平気で吐いていた同じ口からお念仏「南無阿彌陀仏」が出てくること、そしてまた、時には、人様の頭を叩こうとしたり、ものを盗ろうとした同じ手が、自然に合掌されて仏さまを拝むようになる。これは大変わりであり「変わる」面だと。…

* * *

身体の変調を自覚し出したのはお盆過ぎ頃からでした。その症状は日に日に悪くなり、食べること、飲むこと、息を吸ったり吐いたりすることが困難になっていき、その原因が悪性の腫瘍であると判り入院加療が始まりました。すぐさま始まった過酷な化学治療でしたが、それでも少しずつ体調が改善されてくると、考える余裕が生れ、

色々なことに思いが巡らせられるようになってきます。それは、直接的な命のことであったり、経済的なことであったり、やが一番多かったのは、身近な家族、友やご門徒への思いでした。時には殊勝な心でいっぱいにもなりましたが、その思いも継続しないのです。

しかし、身に沁みて味わった気づきがありました。一刻一刻、命を思わずにおれない状態にあっても、我が身というとらわれの心から出る欲から離れることができない「変わらない」私です。そして、そのような「変わる、変わらん」ままの私に、ずっと親鸞聖人のお念仏のみ教えの優しさが届いてあったことです。

ご法義は、幾度重ねてお聞かせいただいても増えていくわけではありません。聴いても聞いても、気づいても気づかされても、自分中心の三毒五欲の中に生き続けているお互い、「変わる、変わらん」を繰り返す私たちです。

だからこそお念仏申し、気づき直させていただくのです。親鸞聖人はいつも、「力なく命終えるとき、必ず掴みとってお浄土へ生まれさせて下さる如来の大慈悲にお任せして、安心していのちを全うせよ」と、力づけて下さっていたのです。

報恩講は報恩感謝の集い、気づきのご勝縁です。どうぞお参り下さい。 合掌

宗祖親鸞聖人報恩講

日時
11月26日(木)
午前11時より

「真宗宗歌」
正信偈
法話
ご文章拝読
「恩徳讃」
～*～
おとき
お抹茶接待

浄土真宗のみ教えを開いてお示し下さった親鸞聖人のご苦勞を偲びお慕いして営まれる浄土真宗の大切な法要をお迎えします。ご法事なのに、朱の蠟燭に最も華やかなお荘厳でお勤めするのは、私たちがお念仏を申す人生を歩ませていただく何よりの勝縁だからです。本来ご法事とは、縁ある人々が集いそのご縁に遇えることは、親様と呼ばれる親鸞聖人とご先祖のおかげと感謝し、ご恩に報いるためお勤めさせていただくものです。どうぞお参り下さい。



お礼

ご心配おかけしておりましたが通院治療できるまでになり、ひとまず退院することができました。おかげさまで今のところ治療は順調に進んでおり、感染症などに気をつけながら2月まで予定された化学治療が滞りなく受けられるよう養生するのが、今の私の仕事だと思っています。皆さまのお心遣いありがたく、心より御礼申し上げます。お一人お一人にお礼できませんこと紙面を借りてお詫びいたします。ありがとうございました。

仏教が生んだ日本語 【入院】

この入院という言葉も、もとは仏教語である。老病死、という誰も避けることのできない存在の課題を正面から引き受け、その苦悩を超克するために出家して寺院に入ることを、入院と言うのである。入院中は、日頃は忘れていたことが多い、生老病死という人生の厳粛な事実を思い知らされていた。病院に入ることと寺院に入ること、それらが妙に重なって、ふと気がつくと、今でも難しい90年という長い人生を生き抜いた親鸞聖人の生涯に思いを馳せていた。

(参考、大谷大学編
「仏教が生んだ日本語」)

編集後記

はからずも見舞いを受ける身になって、単にありがたいという単純なものではない、その方々の「見舞い上手」に感心することしきりだ。■もちろん恩着せがましきなどは決して感じさせない。その中には黙って見守ってくれる人もいるが、何もせずに案ずるという気遣いの大変さも伝わる。ことさらに同情するものでもない。むやみに明るすぎもしない。悟りきったようなことも言わない。確信のない情報で治療を惑わせるようなことはしない。心を寄せてくれる皆が案じてくれているのを病床でひしひし感じながら、自分はどのように出来ていただろうかと省みる。■その誰もが、自分もしくは大切な家族がその立場になったことがあるからだろうか。思えば皆、その経験を通り抜けてきた人ばかりだ。経験がそうさせる人間を育てたのか…、もともと下地があったからそう消化でき、思いやりを上手く相手に伝えられるようになったのか…。寸前の命を思う病を経験しても自分はその優しさを返せるようになるのだろうか…。■親鸞聖人の口伝抄を思う。家族を亡くし、うろたえ嘆き悲しむ人たちに、信仰深く帰依した念仏者と言われる人が「取り乱すな。往生したのだから、めでたく、喜ぶべきだ」と言うのを聞いて、「飾らずに嘆き悲しむことこそ、他力を信ずる凡夫の姿だ」と親鸞聖人はおっしゃっていた。■日頃から人間の素直な心の働きを感じ大事にしなければ、血の通った人間味あふれる言葉や行動は出てこないし伝わらないだろう。人間の善悪の脆さを超え、本当の悲しみというものを理解させ気づかせる深い心を育むのが宗教のはずだが、「宗教」を傘にきた、パリの同時多発テロ、ロシア機の爆破など、テロの恐怖が世界中に広がっている。■相手に同情するのを善とするのも思い上がり、自分が正当化されず虐げられているから戦うというのを善とするのも思い上がり、戦いはいつも両方が善だと言い張って起こっている。「善行」と思ってやるのが過ちを犯させているのだ。「善」こそ難しいものだと思うされる。(N)